

## 異文化が私に与えてくれるもの

08L048 滝沢 亮

「異文化コミュニケーション論」の受講を通して、私は、真の「国際化」、「グローバリゼーション」とは一体どのようなものであるのかということ、そしてそれを達成させる上で現在の私に足りないものについて考えた。前期の授業を通して、他国の文化をそのまま取り入れ、それに倣い自分の価値観や自国の文化を塗り替えるような行為は、決して適切な「国際化」とは言えないということを学んだ。そうであるならば、「国際化」や「国際人」のモデルはどこにあるのか。後期の授業で学んだ明治期の知識人の生き方をヒントに「異文化コミュニケーション」とは何たるかについて論じてみたい。

後期の授業では、明治期の偉人である新渡戸稲造、福沢諭吉、夏目漱石らの生き方が取り上げられた。急速な西欧化がもたらした当時の文化的衝撃を学び、その衝撃を受けた彼らの内的葛藤や異文化受容の経緯を見てきた。日本の伝統にはぐくまれた武士道精神、忠義を貫き通すことを美德としてきた感性、また「サムライ」に象徴される日本独自のあらゆるスタイルが、西洋文化と触れ合う中で変容を迫られていた時代を彼らは生きた。

彼らは、突然押し寄せてくる「異文化」に対して真っ向からぶつかりながらも、西欧と日本の狭間に立ち、世界情勢に疎く、技術的にも後れを取っていた当時の日本をなんとか先進化させようと必死だった。私は、当時の彼らの葛藤に思いを馳せながら、そのような生き方の中にこそ真の「異文化コミュニケーション」が内包されているのではないかと思った。ただ他国の文化を知り、それに倣うのではなく、それらの知識を蓄えた上で、自国のものと比較し、より優れたものだとか判断したものは取り入れ、時には衝突しあいながら、その異なった二つの妥協点を独自に生み出すことこそ、真の「国際人」の仕事と言えるのではないか。

また、国際化の中で大事なことは、各々の価値観という独自のレンズを通して異文化を見るということであり、「国際人とは」と一概に定義づけられるものではないということも学んだ。「異文化」とは書いて字のごとく「異」なった「文化」であり、容易に受け入れられない側面があっても、何らおかしいことではないのだ。私自身、他との衝突を嫌う傾向にあるためこのことを誤解していたことに気づいた。単なる「文化交流」で終結させないためにも、学んだものを脳で処理し、それを受け入れるという浅薄な上辺だけのやり取りではなく、良いものは良い、悪いものは悪いと自分なりに判断し、その価値観を中心に異文化との衝突と妥協を繰り返す、そんな心と心のぶつかり合いを通してこそ、真の「異文化理解」が可能なのだろう。

書物や文献を自主的に読むだけでもできるような、他から吸収した知識を脳で咀嚼し、受け入れるだけという機械的な理解は、「異文化コミュニケーション」とは言えない。なぜなら、「コミュニケーション」と銘打っている以上、そこには一方的ではなく、相互的な関与が存在しなくては「コミュニケーション」は成り立たないからだ。理解したことに対して自分なりの解釈を持ち、それを自分の文化や他の文化に還元できてこそ、真の「異文化コミュニケーション」と言える。

「異文化コミュニケーション」を達成する上で、現在の私に足りないものは何かについて次に考察してみたい。「異文化コミュニケーション」には、「理解」が不可欠ではあるが、その「理解」に対する姿勢を学ばなければそれを十二分に行うことはできない。最近の『新潟日報』（「海外留学減る」2010年7月13日）

の記事に、日本の若者は米中韓に比べ、「社会と積極的にかわりたい」という人や、留学希望者の割合が低いという調査報告があった。同記事で「こういった留学への敬遠は、就職活動の早期化などに原因がある」と、文科省の水見谷直紀氏は述べているが、大学生である私もそのことは周囲の様子から察知していた。語学や国際関係のコースがあり、金銭面でも留学をバックアップできる環境にあるはずの敬和学園大学でも、留学したという話はそう多くはない。

またこれは実体験だが、一年生の冬季の休暇期間にボランティア活動の一環で、マレーシアに行ったことがある。仲間との良い思い出にはなったものの、「マレーシア」という日本とは違う環境を十分に活かすことができず、その貴重な体験を自己の成長の糧にすることはできなかった。「海外」という普段とは違う環境に身をおいても、コミュニケーションをいつもと変わらぬままに内輪で完結させていては意味が無いということを感じ知らされた。海外生活という体験を最大限に活かせなかった自分に悔しさを覚えるとともに、私自身の異文化との向き合い方については考え直すべきところが多かった。

異文化の中にいるのだから、そこでしかできないことをしなくては自己の成長は見込めない。そうならないうちにも日本にいながらにしてさまざまなことに興味を持ち、積極的に社会に繰り出す必要がある。その延長として、海外でも臆することなくコミュニケーションが取れるようになり、そこで得た経験を自己の成長にフィードバックできるのだろう。

それをわきまえた上で、同記事でアジア太平洋大学の近藤祐一教授が述べるように「“アウェー”で一度勝負してみる」ことが大事である。異文化との関わり方を学ぶ経験を得るためにも、留学という手段で異文化と“勝負”する効果は計り知れない。

さらに、「海外に行く」という行動に移るためには、外の世界に対する「希望」が必要である。東大社会科学研究所教授の玄田有史氏は、自身の「希望」に対する必要性をつづり、「未知なる外の世界に挑戦しようとして行動しなくなったとき、必ず失われるものがある。それは「希望」である。」と述べている（『新潟日報』「つながりが作る希望」2011年1月5日）。外の世界に行くということは、外に行こうとすればするほどそれだけ気力があることで、その挑戦するという前向きな気持ちが「希望」であるというのが氏の主張である。氏の述べるとおり、希望というものが未来に対する行動を支え、またそういった前向きな行動こそが今後を生きる希望になるのだろう。

大学生活を送る中で、私は様々な活動に参加してきた。それらの行動は、色々な人と関わる経験を通して自己の成長を目指していきたいという明確な目標があったからこそ成しえたことだ。私はもともと「外」に出て行くのは嫌いではない。この気質を活かして機会があれば積極的に海外に行き、未知の世界を体験し、異文化と向き合っていきたい。

「異文化コミュニケーション論」の講義を受け、異文化交流による新たな自己の発見、近代化を迫られた日本の在り方の模索など、異文化の捉え方や適切な向き合い方のヒントが得られた。異文化と接する機会が多くなった現代を十分に生きるためには、様々な文化と折り合いをつけながらうまく付き合っていかなければならない。この講義で学んだ異文化コミュニケーションの学びを活かし、今後異文化にさらに深く向き合う生活を充実させていきたい。

(担当教員 中村義実)